

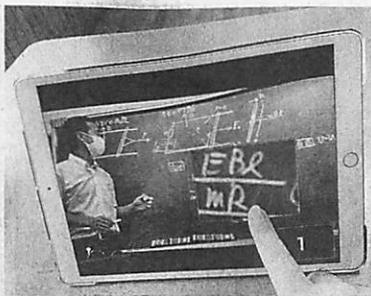
オンライン授業に助成を

重い病気などを理由に長期入院を強いられる高校生にとって、治療と学業の両立は大きな課題だ。義務教育期間中の小中学生と違い、病院内の「院内学級」などで学ぶ仕組みはほぼない。一方で、新型コロナウイルス禍でオンライン教育が進んだことから希望も見えつつある。愛知県では小児がんの専門医らが七月から、オンライン授業実現への公費助成などを求めて活動を始めた。

(編集委員・安藤明夫)

長期入院の高校生 支援手薄

目の前のタブレット端末に映るのは物理の授業だ。自宅から参加する一宮高三年、今津樹音さん(17)は愛知県稲沢市に指で画面を操作すると、黒板の数式が拡大された。臨場感は、教室にいるの



kubiを使って授業に参加する今津樹音さん。目のように画面を操作し、文字を大きく映すこともできる



とほぼ変わらない。使っているのは「kubi」というオンライン会議用機材。遠隔操作で教室内を映すカメラを見たい部分に動かしたり、双方向で話したりもできる。

今津さんは中学二年の時に、小児がんを発症。一年四月にわたって入院した名古屋大病院では院内学級で勉強に励み、第一志望の同校に合格した。

しかし昨年五月、高熱や腎臓・肝臓の機能障害を伴う難病「成人スチル病」になって年末まで同大病院に入院した際は、高校生向けの院内学級はなかった。県は六年前に病院への訪問教育制度を設けたが、日数や科目が限られ、必要な履修単位を満たせなかった。

kubiの使用は入院中の九月から。きっかけは、国立病院機構名古屋医療センター上席研究員、堀部敬三さん(61)らが国の助成を受けて二〇一九年度から進めていた、高校生のがん患者に対する教育支援の研究だ。その一環としてkubiを貸与していたため、主治医の同大小児科教授、高橋義行さん(金也)や担任教師、ソーシャルワーカーらが話し合い、同校初のオンライン授業が実現した。

退院後も、感染対策のため自宅で授業を受ける。体育以外は全て出席し、卒業のめども立った。夢は理学療法士で、医療系の大学を目指す。

「学びを闘病の力に」

昨年の発症直後には集中治療室(ICU)に入るなど危険な状態に陥ったが「いろんな方の応援のおかげで、ここまで来られた。感謝を忘れずに、前を向いて生きていきませう」と力を込める。

母親の志穂さんは入院中の樹音さんに付き添う中で、学業をあきらめるしかない高校生の例を多く見聞きした。「行政や学校で対応はまちまち。つらい闘病中に未来への希望を失わないため、学ぶ機会を保障してほしい」と願う。

堀部さんらの研究グループはこれまで、同県内に住む療養中の高校生九人に機器を貸し出したが、国の助成は本年度で終わる。そこで七月、堀部さんと高橋さんらは「病気療養中の高校生のオンラインによる授業参加を実現する会」を結成した。翌八月、同県の大村秀章知事に機器導入への助成などを要望した際には、今津さんもkubiを使って



kubiは端末の下の部分が動き、見たい部分にカメラを向けられる。愛知県内の高校で

参加。「進級や進学的不安を感じることもなく、学校の授業が受けられるシステムを整備してください」と訴えた。これを受け、長谷川洋教育長は県議会九月定例会で、県立高の生徒に対し「より効果的にオンライン授業が行えるよう必要な整備を行っていく」などと答弁し、県として機器の配備を図る考えを示した。

昨春の一斉休校以降、高校生を含め、病気療養中の子どもへのオンライン授業の試みは各都道府県で進んでいる。学校側もオンラインに慣れ、授業を配信するハードルは下がっているようだ。堀部さんによると、患者の学びには「治療スケジュールの調整や学習場所の確保など病院側の理解が欠かせない」という。「学校、行政との連携調整役も担う必要がある」とも。

一般に、専門医がいて小児がんの治療ができる病院は学業支援に熱心だ。しかし、小児科の治療対象は基本的に十四歳以下。それを超えると成人の診療科に振り分けられる例も多く、学習の必要性についての理解度は医師やスタッフによって差がある。同会は今後、学ぶことがどれだけ闘病の力になるかなど、病院向けの研修を進める方針だ。

つなごう 医療